

伊藤左千夫と観潮楼歌会

——石川啄木との関係を中心に——

貞光 威

伊藤左千夫は、広く知られているように「叫びの説」と呼ばれる歌論を書いている。すなわち、大正元年（一九一二）から翌年にかけて、「アララギ」に「叫びと話」「叫びのこもり」などの歌論を発表した。彼はその歌論において、短歌においては、作品の中どの程度に「叫び」が含まれ、どの程度にその叫びが自然であるかによって作品の価値が決まると言っており、内から衝迫する感情のゆるぎが声調のひびきとなって表れた作品を理想と考えた。主情的で、声調を重視する傾向の強かった左千夫らしい歌論といえよう。

彼の詠んだ

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いにおこる

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ木も鳴りふるひけむ

池水は濁りににぎり藤なみの影もうつらず雨降りしきる

人の住む国辺を出でて白波が大地両分けしはてに来にけり

闇ながら夜はふけにつつ水の上にたすけ呼ぶこゑ牛叫ぶこゑ

などの歌は、いずれも万葉集の影響を思わせる、重々しく堂々とした声調で、感情が流露しており、彼の唱えた「叫びの説」を実践した作品とすることが出来る。

一方の石川啄木は新詩社の歌人として出発しているが、強く与謝野晶子の影響を受けている。新詩社の人々は浪漫性を重んじて、夢を追う傾向が強く、「馬酔木」「アララギ」に拠った歌人たちが、「万葉集」を重視し、写生を尊び、現実在即する傾向を持ったのは対蹠的な関係にあり、啄木もその例外ではなかった。

それだけでなく、啄木は明治四〇年代になると、短歌について、

「明星」の多くの歌人たちよりも一歩進んだ考え方を持つようになった。たとえば『一握の砂』に対する抱負を、彼は「単に歌らしい歌、歌らしい想をまとめた歌を著者は排斥する。そして出来るだけ率直に、出来るだけ飾らずに、人生諸般の事象を歌ってみたい。そこに新しい短歌の曙光は開けはせぬだらうか。」と「スバル」に掲げた広告の中で言っている。彼はこれからの短歌は、従来の考え方を踏襲するばかりでは駄目で、小説の分野で主流となりつつあった自然主義の手法の導入が必要であると考えた。

啄木は「一利己主義者と友人との対話」（「創作」明治四三年一月）では、その具体的な方法として、

一、現代の言葉に近い用語をできるだけ使うこと。

二、五音・七音にこだわらずに、必要に応じて字余りやその分解を考えること。

を挙げており、その延長線上で、短歌の三行書き、句読点・疑問符・感嘆符・ダッシュなどの採用、行の字下げなども行なった。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

わが妻のむかしの願ひ
音楽のことにかかりき
今はうたはず

船に酔ひてやさしくなれる
いもうとの眼見ゆ
津軽の海を思へば

放たれし女のごとく、
わが妻の振舞ふ日なり。

ダリヤを見入る。

庭のそとを白き犬ゆけり。

ふりむきて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

などの歌には、先の歌論、「一利己主義者と友人との対話」に述べられたような考えに立って、いわば日記の一コマのような、日々の生活の中での心の動きが歌われており、啄木の短歌は左千夫の「叫び」の歌とはきわめて対蹠的で、遠い位置にあったと見られる。

ところが、このように短歌についての考えが大きく違った左千夫と啄木とが、何度も歌会で席を同じくし、歌について議論をするという機会が生まれる。森鷗外が主宰した「観潮楼歌会」に二人が共に招かれたためである。

「観潮楼歌会」は森鷗外が主宰した歌会で、明治四〇年（一九〇七）三月三〇日に始まり、約三年間つづけられた。会場は東京本郷駒込千駄木町二一番地の鷗外の自宅の二階の二畳の座敷であてられた。会場にあてられた鷗外の家からは、当時は海が眺められたところから、観潮楼歌会と称されたという。

鷗外は歌会を開いた目的について、詩集『沙羅の木』（大四・九）の序文の中で、

其頃雑誌にあらざると明星とが参商の如くに隔たつてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめやうと思つて、双方を代表すべき作者を請待した。此毎月一度の会は久しく続いた。

と述べている。鷗外は、そのためにアララギ派の代表として伊藤左千夫、明星派の代表として与謝野鉄幹、それにその中間に立つ第三者的な歌人として竹柏会の代表の佐佐木信綱、の三人を招き、それに鷗外が加わった。最初の歌会は、この四人が中心となり、これに世話役として平野万里が参加している。平野万里は与謝野鉄幹に師事して新詩社に加わった中堅歌人であるが、森鷗外の家にも早くか

ら出入りしていたところから、鷗外の求めに応じて、この歌会に世話役として加わったらしい。その後は出席者の友人や弟子すじにあたる人物などが徐々に加わって、一〇人前後になることもあったようである。

最初の歌会は明治四〇年三月三〇日に開かれ、以後、毎月原則として一回、三年間つづけられた。四三年四月一六日が、開催が確認されている最後の歌会である。その間に、記録などから見て開催が今日までに確認されているのは二六回である。

そこでの歌会がどのように行われたかについて、左千夫が寺田憲宛の四月一日付書簡で知らせているのを見ると、鷗外が最初にこの歌会の主旨を述べ、そのやり方について相談を持ちかけたので、左千夫が毎月、会合を催して、それぞれの作品を批評し合うことを提案、それが採用されたらしい。この日は左千夫の持参した「近作十二首」を批評することになって、鷗外がその作品を面白いと喜び、佐佐木信綱が六首をとり、与謝野鉄幹が二首をとったと、左千夫は得意気に報告している。その近作十二首というのは、制作の時期、作品数および内容などから、アララギの歌人でもあった岡麿の発行する雑誌「趣味」二巻四号（明治四〇年四月）に設けられていた同派の歌人のための見開き二ページの「趣味歌壇」に発表された次の作品と推定される。

アンナ、シヤエフアル嬢に寄す

丁未春三月独逸国の音楽大家アンナ、シヤエフアル嬢の
来朝あり、一夕其会に臨みて親しく嬢の霊楽を聴くこと
を得ぬ、感嘆のあまりに短歌十二首を賦す。

ひんがしの春の海原はろはろに日の本恋ひてまる来し乙姫
日の本の春のやまかは花ふゝみ君がたへなる楽をむかへむ
春花のさくらにかをる日の本は君が思ひをやるに足るらむ
しらたまの清女君はかならずや吾がしき島の春をめぐらめ
白あやの長裳すそ曳き立ち出る君をつちふむひとと思へや
真玉手を玉手を繁々にかきなすや妙なる楽は神も舞ふべく
なる沢の遠音の如く谿かはのさゝやく如く聴くになしも
若草の恋ならなくにひと目視しわが目に残る君は消えめや
花かをる天の足夜に君を迎へやまとには語り告ぐべし
日の本の天の佐保神しが花を継て咲かしめをとめとめなむ
花めづるにしひと少女日の本の花に酔はせよ家わするまで
夢の如ながるゝはしの行き過ぎに過ぎか消ゆらむ西人少女

観潮楼歌会のために左千夫だけが作品を携えて行ったところに、
彼のこの会に対する期待や熱意がうかがえる。

第二回の歌会については、左千夫が篠原志都児宛の明治四〇年四
月一〇日付書簡の中で、

先日より当地にも妙な事が始まり候森鷗外博士の発起にて佐々
木与謝野と小生と、主人を合せて四人の会合有之、先月三十日
第一会をやり、今月六日第二会をやり申候要は鷗外等の求に依
れるものに候此間は上田敏も傍聴に来られ毎会来度と被申候佐
々木や与謝野の歌を森上田など真面目なる人々の前にて極力痛
論を加へやるは聊か愉快に候彼等は可成ダケウせんとする風あ
れど小生ハ断として論鋒を緩め不申候森氏上田氏などは真面目
な丈け意外ニ話が解り申候

と述べており、前もって決めた題で詠んだ歌を持ち寄る兼題と、そ
の日に題が出されてその場で詠む席題の両方の作品を、それぞれ自
由に批評し合う形で歌会が進められたようである。その翌々年に左
千夫に連れられて会に出席した斎藤茂吉は、「観潮楼歌会断片記」
〔芸林間歩〕昭和二十一年六月〕において、

酒付の晚餐が終つて暫らくすると、出席の銘々が選をする。選
が終ると、与謝野寛氏が美声を以て読みあげる。読みあげられ
た歌の作者は名告るといふ具合にして採点したものである。こ

の採点する時になると、母堂と夫人とが見えられる。さうして鷗外先生の歌に点がかかる毎にこにこして居られる。茉莉さんが未だ小さく先生の側を離れず帳面に絵をかくて居られる。平野万里氏も先生の傍にゐて万事の世話をされるといふ、さういふ塩梅の会合であつた。

と述べており、最初にいくつかの題が出されると、時間をかけてめいめいが短歌を作って、時間が来ると名を記さないまま提出する。それを各自が選をする。選に入った歌が読み上げられると、その歌の作者が名乗り、その後で出席者が自由に歌を批評し合うというような歌会であつたらしい。

出席者の作品を左千夫が盛んに批評したことは、左千夫自身が、先の篠原宛書簡で、「彼等は可成ダケウせんとする風あれど小生ハ断として論鋒を緩め不申候」と述べていたが、平野万里も、

作歌後の批判戦は伊藤氏の一人舞台で、対等の太刀打は誰も出来なかつたのではないかと思ふ。先生も唯にこにこして聞いて居られただけと覚えてゐる。

と『観潮楼歌会』のことなどという、歌会の思い出を記した文章（『芸林間歩』昭和二年五月）の中で書いている。なお、ここで「先生」といつているのは森鷗外のことである。

歌会の様子を伝えるものに、森於菟の『森鷗外』（昭和二十一年七

月 養徳社）に収められた「観潮楼始末記」という文章もある。そこには、

夏の観潮楼の一夜、それは明治四十二年と思ふ。月例の歌会が催されてゐた。父の外には竹柏園の佐々木信綱氏、いつも紋付羽織袴でお公卿様のやうな端麗な風采で悠然と柱に背を寄せられて居られる。わざと縁側に座布団を持つて来て、あぐらをかいて腕を組むのは肥大漢根岸派伊藤左千夫氏、新詩社の御大与謝野寛氏はすべてに滑らかなとりなしで起居も丁寧である。皆題によつて和歌の案を練つて居るのであつた。おでこの石川啄木氏が頭に浮かんだ和歌を特有のキンキン響く声で口ずさむと父が、大声で笑ふ。伯爵の若殿吉井勇氏は大柄な立派な体軀でゆつたり控へて居る。其他北原白秋、平出修、木下太郎の諸氏、又私の幼馴染の平野万里氏の顔も見える。

と書かれていて、歌会の出席者の様子を生き生きと伝えている。全体として都会的というか、貴族的というか、静かに優雅な雰囲気の中で、左千夫だけが田舎人風に振る舞っているのが分かつて興味深い。森於菟はそれを「わざと」と、左千夫が意識してとつた態度のように好意的に解釈しているが、それは左千夫が意識してとつた態度というよりは、むしろ左千夫の本来のものであつたと思われる。

現在までに左千夫の出席が判明している歌会は、次の十四回であ

る。ついでに、その日の出席者も記し、その中で石川啄木の出席した日には、日付の後に○印を記し、出席者である啄木の名前に傍線を付しておく。

明治40年3月30日 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里

4月6日 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 上田敏

5月4日 鷗外 左千夫 上田敏

7月6日 鷗外 左千夫 長塚節

明治41年5月2日○ 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 白秋

吉井勇 石川啄木

6月6日 鷗外 左千夫 万里

7月4日○ 鷗外 左千夫 万里 啄木 勇 白秋

9月5日○ 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 啄木 勇

賀古鶴所

10月3日○ 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 啄木

勇 白秋 鶴所 服部躬治 古泉千樫

太田奎太郎

11月7日○ 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 啄木

白秋 勇 平出修

明治42年1月9日○ 鷗外 鉄幹 左千夫 啄木 万里 千樫

敏 勇 奎太郎 斎藤茂吉

2月6日 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 茂吉

千樫 白秋 勇 奎太郎 平福百穂

3月6日 鷗外 信綱 左千夫 万里 千樫 白秋

奎太郎

4月5日 鷗外 信綱 鉄幹 左千夫 万里 茂吉

白秋 奎太郎 千樫 敏 修

石川啄木は、明治四一年（一九〇八）五月二日、与謝野鉄幹に連れられて初めて「観潮楼歌会」に出席したが、そのときの様子を次のようにその日の日記に記している。

かねて案内をうけて居た森鷗外氏宅の歌会に臨む。客は佐々木信綱、伊藤左千夫、平野万里、吉井勇、北原白秋に予ら二人、主人を合せて八人であつた。平野君を除いては初めての人許り。鷗外氏は色の黒い、立派な体格の、髯の美しい、誰が見ても軍医総監とうなづかれる人であつた。信綱は温厚な風采、女弟子が千人近くもあるのも無理は無いと思ふ。左千夫は所謂根岸派の歌人で、近頃一種の野趣ある小説をかき出したが、風采はマルデ田舎の村長様みたいで、随分ソツカしい男だ。年は三十七八にもならう。

角、逃ぐ、とる、壁、鳴、の五字を結んで一人五首の運座。

御馳走は立派な洋食。八時頃作り上げて採点の結果、鷗外十五点、万里十四点、僕と与謝野氏と吉井君が各々十二点、白秋七点、信綱五点、左千夫四点。親譲りの歌の先生で大学の講師なる信綱君の五点は、實際気の毒であつた。鷗外氏は、御馳走のキキメが現れたやうだね。」と哄笑せられた。次の題は、赤、切る、塗物の三題。九時半になつて散会。

右の啄木の日記を読むと、鷗外については当然のこととして、信綱にも相当の尊敬の気持ちを示しているのに対して、左千夫についてはそういう気持ちを全く示していないことが注目される。

ここで、歌会に三回以上出席した者を対象にして、「観潮楼歌会」が終わる明治四二年（一九〇九）における出席者の年齢（数え年）をと出席回数を調べてみると、次の表のようである。

| 出席回数 | 氏名 | 誕生年月 | 年齢 |
|------|-------|---------------|-----|
| 主人 | 森 鷗外 | 文久二年（一八六二）二月 | 四八歳 |
| 一四回 | 伊藤左千夫 | 元治元年（一八六四）九月 | 四六歳 |
| 一〇回 | 佐佐木信綱 | 明治五年（一八七二）六月 | 三八歳 |
| 九回 | 与謝野鉄幹 | 明治六年（一八七三）二月 | 三七歳 |
| 四回 | 上田 敏 | 明治七年（一八七四）一〇月 | 三六歳 |

| | | | |
|-----|--------|----------------|-----|
| 三回 | 斎藤 茂吉 | 明治一五年（一八八二）五月 | 二八歳 |
| 七回 | 北原 白秋 | 明治一八年（一八八五）一月 | 二五歳 |
| 一二回 | 平野 万里 | 明治一八年（一八八五）五月 | 二五歳 |
| 五回 | 木下 李太郎 | 明治一八年（一八八五）八月 | 二五歳 |
| 六回 | 石川 啄木 | 明治一九年（一八八六）二月 | 二四歳 |
| 六回 | 古泉 千樫 | 明治一九年（一八八六）九月 | 二四歳 |
| 九回 | 吉井 勇 | 明治一九年（一八八六）一〇月 | 二四歳 |

出席者のうち、明治四二年（一九〇九）に、数え年で三〇代以上になっていた歌人は四人で、森鷗外（四八歳）が最年長、伊藤左千夫（四六歳）がこれにつづき、次の佐佐木信綱（三八歳）は左千夫より八歳年下で、後は与謝野鉄幹（三七歳）、上田敏（三六歳）とそれぞれ一歳の違いでつづいている。それ以外の歌人たちは二〇代半ばの青年たちで、年齢が離れている。

石川啄木は先の日記で、壮年期の歌人に対して、左千夫を除くと、それぞれの歌人に対して尊敬の念を感じさせる書き方をしているのに、左千夫に対してのみは、「風采はマルデ田舎の村長様みたいで、随分ソツカしい男だ。」などと、軽く扱っているのに気づく。啄木の日記には、ほかの箇所にも左千夫が登場するが、扱いは変わらない。これは、観潮楼の主人である鷗外、そして啄木の所属する新

詩社の主宰者である鉄幹は別格として、それ以外の歌人たちが、佐佐木信綱も上田敏もそれぞれ社会的な地位を持っていたのに対し、左千夫は根岸短歌会の主宰者とはいえ、一搾乳業者にすぎなかったことによるもののだろうか。振る舞いが田夫野人といった傾向が濃厚であったせいもあるかも知れない。石川啄木の肖像などから見ると、なかなかスタイルを気にする気取り屋らしいところがうかがえるのに対して、左千夫はその点では全く正反對で、それに強度の近視で眼鏡を二つ重ねて掛けていた。それが啄木には魯鈍と映り、気に入らなかったのかも知れない。また、高等教育を受けた歌人が多い中で、彼は教育らしいものを受けておらず、歌の批評に論理性が乏しかったことによるものかも知えられる。いずれにしても、啄木は左千夫を軽く見ていたことは否めない。

なお、啄木が「近頃一種の野趣ある小説をかき出した」と述べているのは、左千夫が、

| | | |
|--------|---------|-----------|
| 「野菊の墓」 | 「ホトトギス」 | 明治三九年 一月 |
| 「秋 霧」 | 「馬 酔 木」 | 明治三九年 一二月 |
| 「隣の嫁」 | 「ホトトギス」 | 明治四一年 一月 |
| 「春の潮」 | 「ホトトギス」 | 明治四一年 四月 |

のように、小説を執筆しはじめ、かなりの好評を得ていたことを指している。「野趣ある小説」とは、実に冷徹的確な表現で、「言い

得て妙」と言うべきであろう。

啄木の日記には、「観潮楼歌会」に出席した日には、出席者の氏名や歌の課題が几帳面に記されているが、明治四一年の日記では五月の歌会以後は、左千夫のことについては特に触れていない。ところが、一月七日の歌会の記事では、

佐々木、与謝野、伊藤、千櫨、北原、平野、平出の諸氏が既に集まつて居た。主人を合せて十人。

第一回、第二回の運座、共に予は最高点であつた。随分、解き様によつては大胆な歌もあつた。それは大抵与謝野氏のであつた。

伊藤君が、今日の歌には巫山戯たのがあると憤慨した。平野君がそれを駁した。与謝野氏は傍から、伊藤君は初め僕らに無邪気の趣味がないと言つたことがあるが、今日では、僕は伊藤君を学んでそれ以上に巧くなつたのだと揶揄した。

佐々木君の歌には、大胆に新詩社風(?)なのがあつた。

「今夜は佐々木さんの放れ業を拝見した」と与謝野氏だつたか森氏だつたか言ふと、左様じゃありませんが、会の際は矢張可成選ばれる歌を作つた方がようござんすからな」と言つた。皆この告白に笑はされた。

十時少し前に済んで帰つた。

と左千夫が歌会の連中の中で孤立し、立腹し興奮していることが記されている。

次に啄木の日記に左千夫が登場するのは、明治四十二年一月九日の「観潮楼歌会」の記事の中である。啄木が鷗外の主宰する、この歌会に出るのは、これが最後で、以後、啄木は「観潮楼歌会」に姿を見せなくなる。彼が朝日新聞社に校正係として職に就いて時間がとれなかったことも理由の一つではあるが、もっと大きな理由として、彼がこの歌会に意義を感じなくなったことがあると考えられる。

啄木の日記の、彼が最後に歌会に出席した明治四十二年一月九日のところには次のように記されている。

森先生の会だ。四時少しすぎに出かけた。門まで行って、与謝野氏と一緒に、吉井君が一人来てゐた。やがて伊藤君、千樫君、初めての斎藤茂吉君、それから平野君、上田敏氏、おくれて太田君、——今日パンの会もあつたのだ。

題は十一月からの兼題五、披露が済んで、予が十九点、伊藤君が十八点、寛、高湛、勇の三人は十四点、その他——

十時散会。雪が六七分薄く積つて、しきりに降つてゐた。予は伊藤君の傘に入つて色々小説の話をしながら森川町まで来た。傘につもる雪がサラサラと音がする。軒々の火が曇つて見える。

日記の中の「高湛」はタカヤスと読み、鷗外を指す。

この日の啄木の日記によると、啄木は最後に出た観潮楼歌会の、雪の降る夜の帰り道に、伊藤左千夫の傘に入って、小説の話をしながら歩いている。

石川啄木が家族を函館に残して北海道から海路で上京、東京に到着したのは明治四十一年（一九〇八）四月二十八日であった。五月四日には本郷区菊坂町の赤心館に入り、宿願の小説執筆の生活に入っている。そして約一か月の間に「菊池君」「病院の窓」「母」「天鵲絨」「二筋の血」という五編の作品三〇〇枚以上を書いた。啄木は五編の作品の売り込みに奔走したが、いずれも失敗に終わった。また、同四十二年一月一日創刊の「スバル」に、啄木は「赤痢」と題する小説を発表している。啄木は左千夫と、これらの最近に書いた小説のことなどを話し合ったのかとも思われる。一方の左千夫は、明治四一年の一月には「隣の嫁」を、四月には「春の潮」を、いずれも「ホトトギス」に発表している。明治三十九年一月に「ホトトギス」に発表した「野菊の墓」は好評を博し、同年四月五日には俳書堂から出版された。それらの作品が話題になった可能性もある。

観潮楼歌会が終わったのち、いっしょに歩いて帰った歌人の中に左千夫との思い出を語っている人物としては、ほかに佐佐木信綱や与謝野鉄幹がいる。信綱は「名古屋の一夜」（「アララギ」六巻一号 大正二年一月「伊藤左千夫追悼号」という追悼文におい

て、

日露の戦役から帰られた鷗外博士は、毎月短歌会を催はされた。いつも夜が更けて人通りの少ない千駄木から本郷の通を、伊藤君や与謝野君と並んで話しつゝ帰つて来た。

と述べている。与謝野鉄幹も、同じ「追悼号」に寄せた「摯実と熱狂」と題する追悼文の中で、

伊藤左千夫先生に初めて私がお目に掛かったのは、五六年前に森鷗外先生のお宅で毎月短歌会の開かれた席上での事でした。先生の歌を私が注意して拝読したのも、先生の歌論を私が熱心に拝聴したのも同じ其席上での事でした。持ち寄った歌や席上で作った歌を互選する場合に私は大抵先生の歌を採りましたが、先生は殆ど私の歌をお採りにならなかったやうでした。(中略) また或晩その会の帰りに本郷の通りを切通しへ曲がる所まで一緒に話しながら歩いた時、私が「失礼ですが、あなたは、歌より小説の方が巧い、宅の家内なども始終さうお噂して居ります」と云ひましたら、先生は「奥さんがさう云つて小説の方を褒めてくださると云ふ事は僕の耳にも伝はつて居ますが、僕にはさう思はれない」とお話がありました。(中略)

私は此七月の三十日の晩に東京を立つて長門の六連島の講習会に行きましたが、其翌日に突然先生が亡くなられたと云ふこ

とを家内から云つて参りました。啄木君の追悼会で例の元氣のいい肥満した先生にお目に掛つた私は意外の感に打れました。と述べている。これを読むと、竹柏会、新詩社、根岸短歌会をそれぞれ主宰する佐佐木信綱、与謝野鉄幹、伊藤左千夫の三名が、夕方からの鷗外邸での歌会が終わったあと、親しく語り合いながら夜も遅い本郷の通りを帰途についた様子を偲ぶことができる。明治四二年一月九日の雪の夜、啄木が左千夫と小説のことを話しながら帰つたのもそのような状況の中であつたと思われる。

石川啄木は左千夫に対して好意をもっていたようには見られないが、左千夫は啄木に対して親しみをもっていたらしい。それを語る証言としては、同じ「伊藤左千夫追悼号」(「アララギ」六卷一一号 大正二年十一月)に掲載された土岐哀果の「左千夫氏の訃」という文章がある。

哀果は、啄木が朝日新聞社に勤務していたころ読売新聞社に勤め、作歌活動でも傾向を同じくして、啄木の病状の悪化のため目の目を見ずに終わったが、二人で「樹木と果実」という文芸雑誌を発刊することを約束した人物である。明治四五年四月一三日に啄木は世を去ったが、啄木の葬儀は一五日に哀果の生家である浅草松清町の等光寺で、哀果の兄、土岐月章を導師として営まれた。その哀果は、

自身が中心となって開いた石川啄木の追悼会のことについて、

ずっと前から氏の名は知つてゐたが、僕が最近に深く氏を頭に刻みつけたのは啄木の追悼会の時のことで四月の一日にそれを催す計画が決定して、それを本紙の『よみうり抄』に発表したところが、この日の午後に通のハガキが来た。見ると伊藤左千夫氏ので当日出席したいといふ文面である。僕はすこしあわてた。実は啄木の先輩や旧知には、改めて案内状を出すはずにして、その時は、まだそのハガキの印刷前だったのである。左千夫にも無論出すつもりであつた。その先を越されたので面くらつたわけであるが同時に、左千夫氏の人格がはつきり想像しうるやうにおもつた。

追悼会の当日僕は初めて左千夫氏に逢つた。翁のやうな顔に眼鏡を二つかけた岩丈らしい人、あの老青年とでもいふやうな氏の風采は今もはつきりと目の前にある。席上氏は僕の懇請に応じて啄木の芸術について一場の談話をしてくれた。

と書いている。左千夫が二二歳も年齢が下の啄木に、深い友情を抱いて、彼の短歌にも関心をもっていたことがうかがえる。

これまで、石川啄木との関連で、観潮楼歌会の模様を見てきたが、それを離れて、以下、歌会での左千夫の様子と、そこでの彼の作品

を見てみることにしたい。

明治四〇年五月一〇日の新聞「日本」に「勾玉日記」の総題で、次のように掲載されているのは、五月四日開催の第三回歌会での作である。

五月四日

鷗外博士の家に歌の会ありてまゐりぬ、こは世の常の歌会にはあらず、いと六かしき心もて起れるなりけり、さればまどひの人々はおのがしゝ一癖持てる角々しきゝは人のみぞある、会の些事は今書かず、石といふ題にて各癖歌をこそ作り出でけれ、太鼻いと高き一人の男が読る歌。

石踏みてあよむは苦し肉太の吾がゆく道に石なくもがな
黒駒に蹄打ち替へ朝狩の門の石橋鉄の火に鳴る

もろもろの石の器を見つゝゆけど女が持つに似る物は見ず

また、「阿羅々木」一巻二号（明治四二年一月）に掲載された「採草余香 二」の中の第三首目にある

物部をならしの原に梨の実の齒に心地よく笛吹きならす

の歌は、翌五月の歌会での作で、「鳴」の題で詠まれたものらしい。

翌月の六月六日の歌会での左千夫の作品は、『春陽堂版左千夫歌集』に「観潮楼六月歌会」として、次の五首のうちの①②③が掲載され、④⑤が明治四一年九月二日の新聞「日本」の「伊藤左千夫選」とある選歌欄に見える。

蟬塗絵の絹の絵団扇おく机室きよらかに朝人も居ず ①

吾妹子をこしの旅路に雨しげく葉山繁山日もくれにけり ②

石も鉄も切るすべあるを心ちふ人の思ひはせくすべもなし ③

人皆に朱なる血潮ありといへどいかにあらむ君がこのごろ ④

日のめ見ぬこもりが下に色に飢て血潮あせたる思ぞわがする ⑤

右の五首は、①「塗物」、③「切る」、④⑤「赤」の題で詠まれたものと考えられ、②は歌会での即詠と思われるが、題は不明である。

七月四日の歌会の作品は、『春陽堂版左千夫歌集』に「観潮楼七月歌会」の題で五首掲載されている。その五首の中の初めの三首は、明治四一年九月二日の新聞「日本」の「伊藤左千夫選」とある選歌欄の三首と重なる。「阿羅々木」一巻三号（明治四二年三月）に

「題詠」の題で掲載されている第六首は、『春陽堂版左千夫歌集』には収められていないが、これも七月の「観潮楼歌会」での作と推定される。

現身の醜のむくろにとらはるゝ心は苦し焼かむ火もがも ①

のがれいづる道は一すぢ生も死も此の一筋と恋はせまれり ②

親に友に筋の立てりしわがみさは今はあやなや恋のみだれに ③

血になげく心は隠し言葉にはさきくといひて別るかなしも ④

許されぬ人に恋ひつつ白玉の清き思ひもこもりはつべし ⑤

許さまく待ちもだゆるを許してと人の云はぬを誰に嘆かむ ⑥

右の歌の題は①「鬼」、②③「筋」、④「人妻」、⑤⑥「許」と推定される。④は不明である。

左千夫は九月五日の観潮楼歌会にも出ているが、その席での作は明らかでない。一〇月三日の作は、「阿羅々木」一巻二号（明治四二年一月）に掲載された「採草余香 二」の中の次の三首がそれだと推定される。

夜深く唐辛子煮る静けさや引窓の空に星の飛ぶ見ゆ ①

人のする旅にも出でず冬こもる香の友訪ひ七夜留れり ②

秋更けて日和よろしき乾草のうましきかをり小屋に満たせり③

右の歌の題は①「夜」、②③「香」であったと推定される。

十一月の歌会での左千夫の作としては、「阿羅々木」一巻二号

(明治四十二年一月)に掲載された「採草余香 二」の中の第三首目にある一首しか明らかでない。

冬の夜の夜のしづまりにペンの音の耳に入り来つ我がペンの音

この歌の題は「ペン」であったと推定される。

翌、明治四十二年一月の歌会は九日に開かれた。その時の左千夫の歌の一部が「国民新聞」に「短詩会詠草」の題で、①一月一四日、②一月二七日、③一月三〇日、④二月二日に掲載されている。

うたがひの耳に気づきて言ひ消たむ言にまどひぬ心もどろに①
絹張の火屋に立ちまふともし火をかくむ人らは言も静けく②
人ごゝろ或はうつらふこともあると危む口を閉ぢて苦しも③
かまへても恋を恋ひなといさめいふ人によく似し君が顔構④

右の四首の題は、①「消」、②「舞」、③「或」、④「構」である。

一月九日の「観潮楼歌会」について、左千夫は翌一〇日付の胡桃沢勘内宛書簡に、

九日にハ鷗外宅歌会にて茂吉君千樫君と三人にて出席大に気焰を挙申候アカネにてハ小生等が鷗外歌会にゆくとして悪口申居候へとも何処へ参り候とも自家の本領を發揮し候ハ、何の憚る所なしと存候アカネの事ハつくづく話するもいやに候と書いている。

左千夫が「アカネ」にてハ小生等が鷗外歌会にゆくとして悪口申居候へとも」と書いているのは、三井甲之が、自身の主宰する「アカネ」一巻二二号(明治四十二年一月)の「消息」欄において、「今日左千夫氏がホトトギス其の他に小説を執筆し、『国歌』などに論文を出し、信綱鉄幹鷗外諸氏と歌会を開き、アカネには何も書かぬ」などと批判していることを指している。

「アカネ」二巻一号(明治四十二年二月)では、甲之の左千夫やその門下に対する攻撃はさらに激化し、「歌壇漫言」の六ページ全体を左千夫と茂吉の作品の攻撃に費やし、左千夫の作品は教訓的、物語的であると批判している。「アカネ」二巻二号(明治四十二年三月)でも、「歌壇漫言」において、「観潮楼歌会」における左千夫などの作品を「明星派のやり口」として批判するなど攻撃は熾烈である。

二月の歌会は六日に開かれている。その時の左千夫の歌の一部が

「国民新聞」に「新短歌会詠草」の題で、①四月二四日、②四月二一日、③四月二二日に掲載されている。「阿羅々木」一の三（明治四二年四月）の「題詠」欄に掲載された④も「疼」という題で詠んだ、この月の歌会での作と推定される。その日の歌会での作は、

海の国山の国人性別ることしたふとし神のみこころ

①

寒さゆり青きる月夜の春の夜のかかる折なり君を訪ひたりき

②

あかかりに辛塩くはしめ口うづく痛き思ひも自が心から

③

雨まじる雪の遠道を学び舎に嘸といたはる父も母もなく

④

と見られる。題は、①「海」、②「斯」、③「疼」、④「嘸」と推定される。

三月の観潮楼歌会は六日に開かれている。その日に左千夫は次の四首を詠んでいる。

小石打てば水に起れる八重の輪の動きを見つゝ物思ひ涌く

①

世の中ゆ我が気にあはぬ人を除け除け尽しなば我も残らず

②

天地のならぬ時より天地は円かにありし思ひぞ我がする

③

羅浮の神はらかなれや梅の性直枝曲り枝二別れたり

④

この四首の題は、①「輪」、②「除」、③「円」、④「直」と推定される。

四月の観潮楼歌会は五日に開かれている。その時の左千夫の作は、

只ならぬ事やおこれる金門さし朝から人の立ちさわぎ居り

①

世の事も我事もなし花ちらふ長閑けき宿は今日も朝から

②

の二首が明らかになっており、①②ともに題は「朝から」であったと推定される。

観潮楼歌会への左千夫の出席が確認されるのは、現在のところ、この四月歌会までである。観潮楼歌会は明治四三年四月一六日をもって終わりを告げるのだから、左千夫が出席しなくなった後も、約一年間つづけられたことになる。

一九ページの出席回数の一覧表でわかるように、歌会への出席回数は、主人である鷗外をのぞけば、左千夫が会員の中で最も多かった。それほど熱心に出席して、彼の書いた手紙や出席していた人たちの回想などによれば、歌会の席での議論に最も熱心であったらしい左千夫が、明治四二年四月の歌会の後は、なぜまったく出席しなくなったのであろうか。

それについては、まず第一に、この頃になって左千夫の身边がきわめて多事になったことが考えられよう。明治四二年五月一日には八女の鈴子が生まれた。その直後の二四日には七女の奈々枝が庭の池に落ちて死亡した。七月一〇日には三番目の兄の妻のふさが産後の急変で四二歳で死去した。

奈々枝の死亡については、八月一八日から三日間かけて小説「奈々子」を書き、「ホトトギス」(一二巻一二号 明治四二年九月)に発表しており、短歌でも「吾兄のおくつき」八首を「アララギ」(二巻三号 明治四二年一月)に発表、また一周忌には「浮葉」七首を「アララギ」(三巻五号 明治四三年六月)に発表している。「ホトトギス」(二三巻八号 明治四三年一月)に発表した小説の「去年」ではふさの死について書いており、この二つの事件がいかに大きな衝撃であったかを示している。

一方、左千夫が職業とした牛乳搾取販売の仕事も、この頃では同業者が増えて競争が激化し、かなり経営が苦しくなっていた。

左千夫の家は明治四〇年八月に、床上六〇センチにも及ぶ大水害に見舞われた。この水害は乳牛に大きなショックを与えて牛乳の収量の減少をもたらし、経済的な打撃が大きかった。

そこで左千夫は収入の減少を小説の執筆で補おうと考え、執筆の時間を生み出すために、「馬酔木」の編集を、明治三七年(一九〇

四)に根岸短歌会に入会し、作歌に見どころがあると左千夫が考え、仏教信仰の方面で左千夫と意見の合った三井甲之にゆだねようとした。

こうして、これまで左千夫が編集にあたってきた「馬酔木」は明治四一年一月一〇日に四巻三号をもって終刊し、翌二月六日に三井甲之を編集者として、根岸短歌会出版部発行の形で「アカネ」が刊行される。左千夫としては、編集の実務は甲之に任せたものの、あくまで甲之は編集者にとどめ、結社そのものは左千夫自身が指導してゆくつもりであったらしいが、自尊心が人一倍強かった甲之は、左千夫から編集を任せられると、左千夫の指導をほとんど受け入れなくなり、雑誌の性格も一般文芸誌に変えてしまった。その上、左千夫門下の作品を差別してボツにして掲載しないなどのことがあったので、左千夫をはじめとして斎藤茂吉、古泉千樫などが怒って「アカネ」を脱退した。

やがて、四一年一〇月に、蔵真は千葉県山武郡睦岡村の自宅を発行所として、彼が資金を独力で負担して「阿羅々木」を創刊した。ここに、旧「馬酔木」同人たちは一斉に「アカネ」を脱退して「阿羅々木」に移り、「アカネ」は四二年七月に休刊に追い込まれた。

左千夫は「阿羅々木」の編集にも当たっていたが、四二年一〇月からは誌名を仮名書きの「アララギ」と改めて、発行所を東京本所

茅場町の左千夫宅に移している。

左千夫が観潮楼歌会に出席しなくなった事情としては、以上のような様々なことがあって、時間的にも精神的にも観潮楼歌会に出席する余裕がなくなったのが主な理由であろうと推察される。

ここで「観潮楼歌会」が歌壇に与えた影響について考察することにした。藤岡武雄氏は『研究資料現代日本文学 ⑤短歌』の「観潮楼歌会」の項で、

この歌会が、『明星』『アララギ』両派を融合して「国風新興」をはかることにあったとすれば、この鷗外の意図は実現出来なかったといえよう。しかし当時の新進歌人間の交流には大きな寄与があった。

と、新進歌人間の交流を生む結果にはなったが、鷗外の意図した第一の目的は達成されなかったと考えているようである。

しかし、はたして鷗外の意図は実現しなかったのだろうか。鷗外は確かに「あららぎと明星とが参商の如くに隔たつてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめやうと思」ったと言っているが、「接近せしめやう」と言っているだけで、融合と言っているわけではない。たとえば甲という会社と乙という会社とが提携協力して、新しい製品を作り出すように、「明星」と「アララギ」両派の歌人た

ちが、急に今までとは違った歌風の短歌を作るようになることを願ったわけではあるまい。鷗外は観潮楼歌会を、互いに自身に欠けるものを相手から少しでも吸収してもらいたい——まあそれくらいのおおらかな気持で歌会を開催したのではなからうか。聡明な鷗外には、短歌の制作が工場で生産される品物のように簡単にかわるものではないし、それが望ましいものでもないことは当然、知っていたはずである。

藤岡氏も「新進歌人間の交流」には寄与を認めているように、たとえば斎藤茂吉は北原白秋と交渉をもつようになり、作品の上に影響が顕著に表れていることは、木俣修の「茂吉と白秋へその初期における交流と乖離の実態」(『評論明治大正の歌人たち』所収昭和四六・四 明治書院)などが明らかにしており、今日、それは広く認められている。このことだけでも鷗外が歌会を始めるにあたって意図したところは、かなりの程度に実現したと見る事ができるように私は考える。

さらに、もしも新進歌人だけでなく、与謝野鉄幹や伊藤左千夫などにも、観潮楼歌会で接した相手の流派の歌人たちの影響が見えるとするならば、鷗外の主宰した観潮楼歌会は大きな収穫をもたらした、彼の意図したところは望みどおりに実現したと見る事ができるのではないか。

「明星」派の代表の与謝野鉄幹や竹柏会の代表の佐佐木信綱の短歌に観潮楼歌会に出て、特に伊藤左千夫をはじめ根岸短歌会の歌人からどのような影響を受けたかということについては、今の筆者には残念ながら研究不足で明らかにできない。あるいは藤岡氏の考えるようにほとんどなかったかもしれないが、左千夫の短歌観を幾度も聴いて全く影響を受けなかったとは考えにくいとも思う。たとえ歌会の席だけのことにしても、先に引用した啄木の日記の明治四一年一月七日の記事では、与謝野鉄幹が大胆な歌を作るようになり、佐佐木信綱も新詩社風の歌を作ったと啄木に言われている。和やかな雰囲気話し合いながら歌を作ることが何度も行なわれれば、有形無形の影響がでるのが普通ではあるまいか。

一方の、根岸派を代表する左千夫については、観潮楼歌会に出席して、強い影響を受けたと筆者は見るものである。

まず、歌会での作について見ると、観潮楼歌会は題詠であった関係で、体験を重んじ、写生を主とした根岸系の歌人がほとんど歌にできなかったような世界が左千夫の作品に表れたことが挙げられよう。観潮楼歌会で左千夫の詠んだ歌として今まで見てきた作品の中の、

夜深く唐辛子煮る静けさや引窓の空に星の飛ぶ見ゆ

①

冬の夜の夜の静まりにペンの音の耳に入り来つ我がペンの音②
親に友に筋の立てりしわがみさは今はあやなや恋のみだれに③
血になげく心は隠し言葉にはさきくといひて別るかなしも④
許されぬ人に恋ひつつ白玉の清き思ひもこもりはつべし⑤
許さまく待ちもだゆるを許してと人の云はぬを誰に嘆かむ⑥
物部をならしの原に梨の実の齒に心地よく笛吹きならす⑦

の歌などが、その例として挙げられよう。

右の①について、斎藤茂吉は、『左千夫歌集合評 上』（昭和二二年六月 八重山書房）において、

「夜深く唐辛子煮る」の覚官的とも謂ふべきものは、俳諧的といふよりも寧ろ自然主義的、西洋近代文芸的で、これは一面は観潮楼歌会、一面は小説を書いてゐた関係からゴルキイなどの泰西作家或は日本の自然主義の理論・作物、即ち、当時のホトトギスには新しい評論家、阿部次郎、小宮豊隆、片山天弦諸家の論文も載ったことがある。一面は青年門下生との交流さういふ事実によつて覚官的表現が説明できるのである。

と述べている。茂吉は右の批評を、この歌が明治四一年九月の観潮楼歌会の作ということを知らないまま述べているのであるが、彼が予測したとおりやはり観潮楼歌会での作である。左千夫も彼なりに

歌会や「ホトトギス」などの雑誌の動向、門下の茂吉などから受容する所があったのである。

②の歌も、従来の左千夫の歌には見られなかった歌境である。

また、左千夫の作品に③④⑤⑥のように恋の歌が多くなるのも、新詩社の浪漫主義的な傾向が影響したかと考えられる。

⑦は「物部をならしの原に」で、モノノフすなわち兵士を習志野で調練する意を言い、次に「梨の実の歯に心地よく」と梨の実の歯触りの快いことを言い、最後に「心地よく笛吹きならず」と歌っており、強いて解釈するならば、秋の習志野の練兵場にきて梨をかじっている、梨の実の歯触りか心地よい。そこへ心地よい笛の音が聞こえてきた、くらいの意になるのであろうか。「明星」の与謝野晶子の歌を思わせる詠みぶり、これまでの左千夫の歌には見られない作品である。

以上は歌会の席上での作について見たのであるが、それ以外の場所での作品の中に、観潮楼歌会の影響は見られないか。

相手の啄木の方は、左千夫に対しては、先に一八ページに引用した日記の中の「左千夫」という呼び方や、「風采はマルデ田舎の村長様みたいで、随分ソソッカしい男だ。」などという批評からわかるように、左千夫に軽蔑の念さえいだいていたのではないかと思

われて、左千夫から影響を受けた形跡は認められない。

しかし、左千夫の方は啄木の短歌に深い関心をいだいた。それだからこそ、先に紹介したように、土岐善麿（哀果）が中心となって開いた啄木の追悼会に真先に出席を申し込み、追悼会の中では三〇分も啄木の短歌について話したのだと考える。

左千夫は「アララギ」五巻八号（大正元年八月）に「『悲しき玩具』を読む」という文章を書いている。二段組五ページにわたる、約七千六百字の長い文章である。

左千夫はこの文章の冒頭で、観潮楼歌会で何度も逢いながら、眼鏡を二つ重ねて掛けなければ物が見えなかったほどの強度の近眼のため、顔も良くわからずに終わってしまったが、この歌集を読んでみて、石川君の顔が思い浮かぶような気がしたと懐かしげに言う。

しかし、左千夫はこの文章の中で啄木の『悲しき玩具』の短歌を全面的に肯定しているのではない。

左千夫は啄木とは歌に対する考えや要求が違うから、文章にも短歌にも飽き足らぬ点が多いという。啄木の、「忙しい生活の間に心に浮かんで消えてゆく刹那々々の感じを哀惜する」気持ちで歌を詠むという考えについて、刹那の感じを作歌の動機として認めるにしても、さらに心の奥で温めて、調べとなるのを待つべきである。浮かんだままをそのまま歌にしては、それでは生命のある創作とは

言えぬのではないかと反対する。これは「叫びの説」を唱えた左千夫らしい考え方であると言えよう。

左千夫は、さらに啄木の人柄について、酔わない人、酔えない人で、また自分をあまり好いていない、自分の歌を自分で好いていなかったに違いないという。

以上のように、啄木の考え方を批判しながらも、次のような『悲しき玩具』の作品について、「吾輩も嫌ではない。否非常に面白い歌である」として、

いつしかに夏となれりけり。

やみあがりの目にこゝろよき

雨の明るさ！

まくら辺に子を坐らせて

まじまじとその顔を見れば、

逃げてゆきしかな。

猫を飼はゞ、

その猫がまた争ひの種となるらむ。

かなしきわが家。

ほかの、計六首を挙げている。心の動きを、ただそのままに言葉に移すだけでは創作、芸術とは言えないと言いつつも、左千夫は、右に挙げた歌を、「非常に面白く佳作である」という。

それと、もう一つ、啄木の短歌で敬服に堪えないこととして、信念、要求のとおり作品ができていることを左千夫は挙げる。世評ばかりを気にして、確たる考えもなく、試作などといって行き当たりばったりに歌をこしらえている狡猾な歌人と比べて、啄木の短歌は信念に基づいて作られていると言って啄木を称賛している。

左千夫がこの文章を書いたとき、彼と「アララギ」の若手歌人、斎藤茂吉・古泉千樫などとの間には大きな対立が生じて、左千夫は「アララギ」の解散も考えるようになっていた。

『悲しき玩具』を読む」が掲載された「アララギ」五卷八号（大正元年八月）の「消息」の筆者は、編集を担当した古泉千樫であるが、千樫は、そこに、

○アララギの一部の傾向を以て単に新しからんがために新らしきを追ふといふが如き言をなすものあり、これ誤れる見解と存候。……吾等は常に経験を打ち砕き打ち砕き行く若さと力とを更に尊ぶものに候。この若さと力とのひびきが新しき芸術に候。

と記している。この文章で、「世評ばかりを気にして、確たる考へもなく、試作などいつて行き当たりばつたりに歌をこしらへてゐる」と若手を批判攻撃する左千夫に対して、千櫓は古い作風を打ち砕いて新しい時代の短歌を作るのだと述べ、この「消息」の文章は左千夫に対する宣戦の布告に似たものとなっている。

これに対して、左千夫は島木赤彦や斎藤茂吉の

あるものは萩刈日和木瓜の果を二人つみつゝ相恋ひにけり

島木赤彦 「アララギ」五巻二号（明治45年2月）

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時立ちにけり
斎藤茂吉 「アララギ」三巻四号（明治43年5月）

などの歌を歌会や「アララギ」の誌上などで、説明的、記述的で、一個の芸術として内容が充実せず、物足りない」と批判した。すると、赤彦は「新しい作家の歌はみんな面白い。歴史がなくて自由である。鼻につく匂ひがない。」と開き直り、茂吉は左千夫の批評を「甚だ見の浅薄なるものである」「評者の感じ方に一種の障礙がありはしまいか」「見当違いの批評」などと「アララギ」誌上で罵倒したので、ついに左千夫は「アララギ」五巻六号（明治四五年六月）に

「おことはり」と題して、しばらく選歌を休み、歌の批評に力を注ぐ旨を発表した。結社の若手同人たちと左千夫との意見の対立は、これまでも「アララギ」誌上にはつきりと出ていたが、単なる名義だけのこととはいえ、編集発行人である人物が選歌から身を退き、若手の作品の批判に専念するというのは、彼が結社の中で浮き上がり、受け入れられなくなって、それに左千夫があくまで抵抗しようとしているということであろう。結社の内部分裂がここまで進んでいたのである。

この年、大正元年（一九一二）の九月ころ、茂吉と千櫓は「アララギ」の廃刊を決意して左千夫に相談をしたところ、左千夫は無造作に賛成したが、島木赤彦の反対で発行が続けられたことを茂吉は『続明治大正短歌史』（昭和二六年三月 中央公論社）に書いている。

「アララギ」の内部は若手と左千夫とが鋭く対立し、立ち行かなくなっていた。このような状況にあったからこそ、左千夫は啄木について、親近感を強く持ち、歌を面白く感じた面もあろう。

左千夫が、「アララギ」五巻八号（大正元年八月）に『悲しき玩具』を読む」という文章を書いてから半年ほど後に発表した連作の「静なる日」八首（「アララギ」六巻二号 大正二年二月）は次

のような作品である。

静なる日

おとろへし蠅の一つが力なく障子に這ひて日は静かなり
死にたると思へる蠅のはたき見れば畳に落ちて猶うごめくも
廁に来て静かなる日と思ふとき蚊の一つ飛ぶに心とまりぬ
壁の隅に蚊のひそめるを二つ三つ認めそのまゝ廁を出でし
物忘れしたる思ひに心つきぬ汽車工場は今日休なり

七人の児等が遊びに出でゝ居ずおくに我れ一人瓶の山茶花
日影去りて冷たくなりし静けさを惜しむ思ひに黙坐つゞけぬ
勾玉と鈴と柱に掛けありて床の山茶花我れに静けし

この八首には「心の叫び」というような強い感動は歌われていない。「歌に対する考えや要求が違うから、文章にも短歌にも飽き足らぬ」と言い、生命のある創作とは言えないと左千夫が反対した、「生活の間に心に浮かんでは消えてゆく刹那々々の感じを哀惜する」短歌になっている。この歌は、もし三行書きにしたら、啄木の作品と区別がつかないほど、ずいぶん近い歌境にあると思われる。

この「静なる日」が詠まれたのは、「アララギ」六巻一号の予告

では「秋の一日（短歌）」とあるところや、山茶花が詠まれていることから見て大正元年（一九一二）の十一月ごろかと推察される。左千夫は大正二年七月三〇日に未明に脳溢血のため昏睡状態に陥って、その日の午後六時に死去している。この八首には彼の主張した叫びがほとんど認められないのは、世を去る数カ月前の作で、体調もすぐれず、経済的にも苦しく、さらに「天才である」などと褒めて信頼しきって指導してきた斎藤茂吉をはじめ、小泉千樫、土屋文明などの歌人から徹底的な攻撃を受け、事実上は「アララギ」主宰者の地位を失ってしまつて、失意の状態にあつたことも関係していると思われる。しかし、それだけではなく、啄木の歌集『悲しき玩具』に親しみを覚え、「非常に面白く佳作である」と思うようになっていたことが、大きく影響していると考えられる。

この種の歌はほかにも見いだすことができる。「アララギ」六巻三号（大正二年三月）の「小天地」の中の、次の四首なども、「心に浮かんでは消えてゆく刹那々々の感じを哀惜する」短歌と言える。

まづしきに堪へつゝ生くるなど思ひ春寒き朝を小庭掃くなり
三四日寒気のゆりし湿めり土清めながめて生ける思ひあり
児をあまた生みたる妻のうらなづみ心ゆく思なきにしもあらず

朝さえを靄とはなりぬ町のどよみ又常のごと我が小庭かな

考えてみると、左千夫が明治四〇年（一九〇七）三月三〇日、観潮楼歌会の最初の会合に「アンナ、シャエファル嬢に寄す」と題する一二首を提出して、出席者の批評を受けているが、この事実も、他の出席者が何も用意していない中で彼だけが一二首の歌を持って行っていることを考えると、いかに彼がこの歌会に期待と関心をもっていたかを示すものと言えよう。彼が西洋音楽の演奏会に出たのは、このドイツから来たソプラノ歌手の音楽会、ただ一回だけであった可能性が強い。左千夫の短歌や書簡等には、「新仏教会」のそれ以外で音楽会に行った様子は見られない。そう考えると、左千夫は観潮楼歌会に招待されたとき、歌会の性格を考えて、そこに出すにふさわしい作品を得ようとして、「アンナ、シャエファル嬢」の音楽会に行ったのではないかと思われる。これを、彼が最も多くの回数を出席していること、彼が最も熱心に発言したらしいことと合わせて考えると、三井甲之が批判しているように、幾分かは森鷗外の催す観潮楼歌会に出席できるということに名誉を感じる心もあったかも知れないが、ともかく、彼がいかにこの歌会に熱を入れていたかがうかがえる。

永塚功氏は『伊藤左千夫の研究』（平成三年一〇月 桜楓社）の

中で、「観潮楼歌会と左千夫」という項目を立てて、約一七ページを費やして左千夫の観潮楼歌会とのかかわりを詳細に探っており、筆者のこの稿もその学恩を少なからず受けているが、ただ、左千夫が観潮楼歌会の出席した気持ちと、観潮楼歌会から受けた影響について考えとなると、筆者は氏とは考えを異にする。

まず、出席するときの左千夫の気持ちについて、永塚氏は、同書の二四八ページで、先に引用した篠原志都児宛の明治四〇年四月一日付書簡を記した後で、

左千夫はここでも「妙な事が始り候」と書き、歌会への不審を述べている。しかし鷗外の主宰ということで義理をはたそうというのである。

としているが、「妙な事が始り候」というのは、はたして不審感を示すものであろうか。筆者には、左千夫は鷗外に招待者の一人として指名を受けて名誉に感じ、嬉しくてたまらないその気持ちを、照れ隠しで「妙な事」と言ったように思われる。そうでなかったら、観潮楼歌会に出るたびに、篠原志都児や寺田憲に宛てて長い手紙を得意気に書くことをしなかっただろう。最初の歌会に招待を受けた者の中で彼一人が歌を用意して行き、盛んに発言したらしい点も、けっして義理で出席したのではないことを示している。

もう一つの観潮楼歌会から受けた影響という点については、永塚

氏は「観潮楼歌会と左千夫」の結びの部分で、

左千夫は直接作品の上に近代的な意識と感覚とをもって詠むというようなことはなかった。

左千夫がこの交流の中で近代的感覚あるいは近代主義を直ちに体得したとはいいたくない。

と述べている。氏の言う「近代的」とは何かという問題もあるが、それらはここでは問わないことにしても、左千夫の感受性については、筆者は左千夫はなかなか感受性があったと見る者で、その点で永塚氏と見解を大いに異にする。

作歌活動を始めた頃には、「新歌論」と題する歌論を書いて、万葉歌人の中で特に柿本人麻呂の歌を尊重し、声調ゆたかに歌うことを重視していた左千夫が、やがて「万葉論」を書いて、山上憶良を模範として、声調よりも生活の中で生まれる感動を歌にすることを主張するようになった。これは、小説の世界に自然主義が流行しはじめる時期の直前にあたり、時代を先取りしているといえよう。そして、明治以降の歌人の中で最も早い時期に山上憶良の文学を高く評価し、受容した歌人が左千夫であること――

また、左千夫が師と仰いだ正岡子規は短歌の「連作」ということにいっこの価値を認めようとしなかったのに、左千夫が、短歌の弱点を克服する方法であるとし、また連作によって感動の振幅が強ま

るとして、繰り返し短歌の連作の重要性を主張し、実作の上で連作を実行した。それが門下の斎藤茂吉の「死にたまふ母」などに受け継がれて、今では歌人の発表する作品のほとんどが連作形式をとるようになっていくこと――

さらに、左千夫が初めて書いた小説「野菊の墓」が、今日でも若い人々に読まれ続けている数少ない明治期の青春小説の一つであること――

以上のことを考え合わせると、左千夫は学校教育という点では、ほとんど教育らしいものは受けなかったし、そして、彼は師の子規などからも魯鈍であると言われ、確かに俊敏とは言えない点は多々あるが、すくなくとも文学の方面に関しては、持ち前の熱心さと、不思議に時代を先取りするようなきわめて鋭敏で柔軟な感受性を持っていたと筆者は考える。

そのような感受性により、観潮楼歌会においても、左千夫は石川啄木をはじめ与謝野鉄幹や佐々木信綱から多くの影響を受けた。それが左千夫の最晩年の短歌、たとえば、

浮く煙 「アララギ」 二巻 一号 明治四二年 九月

吾兄のおくつき 「アララギ」 二巻 二号 明治四二年 一月

冬のくもり 「アララギ」 四巻 二号 明治四四年 二月

我が命 「アララギ」 四巻 一〇号 明治四四年 一月

ほろびの光 「アララギ」 五卷一 号 大正 元年 一月

静なる日 「アララギ」 六卷 二 号 大正 二年 二月

小天地 「アララギ」 六卷 三 号 大正 二年 三月

などの作品にしつとりとした潤いを与え、しみじみした感動を呼ぶものになっていると筆者は考えるのである。

〔付記〕 大正二年（一九一三）八月二日に亀戸の普門院で行われた伊藤左千夫の葬儀には、森林太郎（鷗外）や佐佐木信綱も参列した模様であり、同年十一月一五日に発行の「アララギ」六卷一〇号「伊藤左千夫追悼号」は、巻頭に森林太郎記「伊藤左千夫年譜考」を掲載している。

なお、左千夫と並んで正岡子規門下の双璧とされ、左千夫の親友であった長塚節は、明治四〇年（一九〇七）七月六日の観潮楼歌会に左千夫と共に出席したが、この歌会に価値を認めず、その後は二度と出席しなかった。